

“Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid” 参加報告

下條 尚志

2023年7月22日（土）と23日（日）の2日間にわたり、東洋大学白山キャンパスにおいて東南アジア学会研究集会“Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid”（対面重視のハイブリッド）が開催された。本集会は、海域アジア・オセアニア研究（NIHU-MAPS）東洋大学拠点との共催であり、筆者も同拠点の研究協力者として参加した。

本集会は、副題の“Dialogues with Anthony Reid”に示されているとおり、アンソニー・リード（Anthony Reid）氏の著書 *A History of Southeast Asia: Critical Crossroads* (Wiley Blackwell, 2015) と、その邦訳『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差路』太田淳・長田紀之監訳（名古屋大学出版会、2021）を念頭に企画されたものである。同著は、巨大政体の発生に抗う多様性を帯び、特異な気候条件、女性の自律性、また国家とは異なる仕組みを持つ東南アジアという地理的空間を世界史上の「^{クリティカル・クロスロード}決定的に重要な交差路」と位置づけ、その文化、社会、経済、政治に関わる歴史を、古代から現代にかけて論じている。

今回のシンポジウムにゲストとして来日したアンソニー・リード氏は、年齢を一切感じさせない明晰かつ軽妙な語り口調で、会場でのディスカッションを大いに盛り上げた。リード氏との対話を重視して構想された本シンポジウムは、3つのセッションで構成されていた。内容は以下のとおりであった。

第一セッションは、『世界史のなかの東南アジア』の書評シンポジウムであった。長田紀之氏、桃木至朗氏、飯島明子氏、杉原薫氏、岸本美緒氏が登壇し、最後にそれらの発表に対する応答をリード氏が行った。長田氏からは監訳者としてリード氏の東南アジアにおける多様性や混雑性、またヴァナキュラリゼーションなどの捉え方、飯島氏からは「東南アジア」という地域区分の考え方、桃木氏からは東南アジア史および世界史の研究・教育への本書の貢献、杉原氏からはグローバルヒストリーのなかでの本書の位置づけ、岸本氏からは東南アジア研究に影響を受けてきた中国史との比較のなかでの東南アジア社会のあり方について報告がなされた。

第二セッションは、ナショナリズム、ジェンダー、環境、経済史などに焦点を当てて、『世界史のなかの東南アジア』を議論するセッションであった。登壇者は今村真央氏、速水洋子氏、Farizah Zakaria 氏、太田淳氏であった。今村氏はナショナリズムの時代における国家なき人々と多様性、速水氏は 20 世紀後半の高度近代（high modernity）の時代における女性、Zakaria 氏は歴史のなかで非人間をエージェントとして捉えようとする近年の環境史の動向、太田氏は 18-19 世紀の「華人の世紀」における経済史に着目して、リード氏の著作に関して議論を展開した。それらの発表を受け、リード氏は、これまでの半生を振り返りながら世界各地の東南アジア研究の展開について論じ、さらにそれに対して石川登氏、Michael Feener 氏がコメントをした。リード氏は、アメリカ、オーストラリア、日本それぞれの東南アジア研究が 20 世紀においてどのように展開してきたのかを論じた。その展開のなかでリード自身がどのように自己形成し、世界各地の研究機関といかに関わってきたのか、また日本の研究者とどう交流してきたのかなど、様々な興味深いエピソードを拝聴することができた。

第三セッションは、リード氏の研究に加え、『バナナと日本人』や『ナマコの眼』の著者として著名な鶴見良行の業績に触れつつ、商品としての自然資源の利用に着目し、東南アジアのフロンティア社会がどのように形成されてきたのかが議論された。発表者はいずれもフィールドワークを重視する東南アジア研究者の長津一史氏、小野林太郎氏、赤嶺淳氏、鈴木伸二氏、西川慧氏、石井正子氏であった。長津氏からはイントロダクションとして海域東南アジアにおける経済価値の高い商品と移動性の高い人々、脆弱な森林資源、小野氏からは考古学的見地から先史時代における東南アジアとオセアニアの間で形成されていた島嶼間のネットワークと海域資源利用、赤嶺氏からは商品としてのナマコの観点から東南アジア史を超越した海域史の展開、鈴木氏からはベトナムにおいて陸域と海域をつなぐゲートの役割を歴史的に果たしてきたマングローブ林、西川氏からは東南アジア島嶼部におけるガンビールとフロンティアの関係、石井氏からはバナナという商品から見えるフィリピンの生産者と日本の消費者の関係について発表が行われた。それぞれの発表に対して長田氏、Zakaria 氏、リード氏がコメントをした。本セッションは、日本で展開されてきた東南アジア研究の重厚な蓄積をいかにして世界に発信していくのかという課題を問いかけるものであった。

以上の 3 つのセッションで構成されたシンポジウムを通じて、リード氏が、東南アジア研究のみならず、ディシプリンを超えてアカデミアに莫大な痕跡を残してきたことをあらためて理解することができた。さらには、東南アジアを全体で捉える必要性を喚起する『世界史のなか

の東南アジア』について議論を重ねることで、今後も東南アジアを対象とする諸研究が発展する可能性が大いにあることを再認識した。近年日本の東南アジアを対象とした諸研究において、対象地域やディシプリンの細分化が顕著に進む傾向にあるが、本書はそうした細分化の流れを食い止め、再びつなぎ合わせてゆく力を帯びている。ただし、現代世界において、東南アジアにおける人やモノ、情報は、その地理的領域を越えてグローバルな規模で流動する傾向がますます強まっている。この複雑な状況を、リード氏の展開してきた東南アジア史の枠組みからどれほど捉えることが可能なのか、今後も議論を積み重ねていく必要があるだろう。

参考文献

- リード、アンソニー 2021『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差点 上・下』（太田 淳・長田紀之監訳）、名古屋大学出版会。
- 今村真央・太田淳・長田紀之・長津一史 2023年12月「東南アジア学会研究集会「Southeast Asia as Critical Crossroads: Dialogues with Anthony Reid」報告」『東南アジア学会会報』119：6-18。

（しもじょう・ひさし 神戸大学）